

編集委員会便り

編集委員会便りを書いているこの時期（3月）になると、例年頭の重い日が続く。年度末で処理すべき仕事が増え、締切に追われることもその理由の一つであるが、花粉症である。目は痒くなり、鼻がつまり、喉まで痛みはじめる。同じ症状で悩まされている読者も多いのではないだろうか。

大戦後に植林された杉が成長し、花粉が大量に飛散し始めたためであるという話を聞いたことがある。実際、いまでは緑に覆われている神戸の六甲山が、幕末に米国使節団から「氷山」と間違われたほどはげ山化が進んでいたように、1950年ごろまでは日本にもはげ山に至る所にあり、その修復のために植林が行われてきたということである（朝日新聞1999年8月）。花粉症患者である筆者にとっては、緑を取り戻すのも考えものついで愚痴りたくもなるが、診療所の先生の話では、「京都北山杉の産地で花粉症患者が多いという話を聞いたことは無いでしょう。これは都市化のせいですよ」とのこと。都市の道路が舗装され、飛散した花粉が定着しづらくなったためだとも聞いた。気にしながらも文献などを調べずにいたところ、偶然学会誌に丁寧な解説記事を見つけた（日生気誌、36（4））。杉花粉症のメッカである日光市で、自動車の通行台数と杉花粉症出現頻度との間に顕著な関連が見られること、スイスでは花粉アレルギー患者の割合が、1926年には都会で1.2%、田舎で0.13%であったものが、1985年には都会と田舎で差が無く（田舎も都会化したため？）10%に増えていたこと、など花粉症の増加と大気汚染との間に密接な関係のあることが紹介されている。とすれば、花粉を非難するのは逆恨みで、花粉症はやはり環境を改変したことへのしっぺ返し、仕方のないことと諦めなければならぬのかもしれない。都市化以前には、現在ほど花粉症が多くはなく、換言すると人間が花粉と共存できていたとすれば、問題は都市従って人間活動と環境との折り合いをどうつけるのかであり必然的に「環境共生」という言葉が思い浮かんでしまう。

本特集テーマ「環境共生建築と省エネルギー」を編集委員会に提案したとき、編集委員の先生方から「環境共生」の定義を始めとする色々な質問、ご意見をいただいた。どのように英訳するかという質問には、い

わゆる共棲を意味するsymbioticなどと答えたが、environmentally friendly buildingが良かったかなと後で考えた（尤もこの意味も考えてみると良く分からないが）。建築の世界に身を置く筆者には、「環境共生」という言葉は知らないうちに身近な存在となっていた。とは言え、具体的どのようにイメージすれば良いか、キッチリと理解しておきたいというのが、このテーマを提案した理由の一つであった。従って、先生方からの質問に明確に答えられるはずもなく、曖昧さを残したまま本特集をお認めいただくこととなった（ように思う）。今回の特集においては、その道の権威に執筆いただくことができ、「環境共生」像が明確にされたのではないかと考えている。

大阪産業大学・松本先生には、建築界におけるエネルギー、環境問題の現状を概観し、環境共生建築の可能性と課題を展望していただいた。寒冷地における環境共生建築については北海道大学・繪内先生に、温暖地における高断熱・高气密住宅については東京理科大学・井上先生に論じていただいた。寒冷地と温暖地の違いが明瞭にされると同時に、くしくも両先生からライフスタイルの持つ重要性が指摘される結果となった。環境共生建築における緑・植栽の役割とそれらが周辺環境に及ぼす影響については、京都大学・高田先生に植栽を採り入れた都市型集合住宅の事例を中心に解説していただいた。㈱日建設・大高氏には、一般業務用建築への自然エネルギー利用とその省エネルギー効果について実施例を通して丁寧に説明いただいた。ここでも、利用者側の理解の重要性が指摘されている。最後に、神戸芸術工科大学・小玉先生には、環境共生建築の海外における現状をGBC（Green Building Challenge）を軸として説明いただき、更に今後の課題と展開を論じていただいた。

冒頭に述べた花粉症であるが、筆者の場合大気汚染などとの複合作用より、消化すべき仕事の滞りとの複合作用の方が説明変数として有意であり、手に余る仕事の多い生活環境と共生できないためという気がしてきた。実際、この原稿が仕上がるにつれて、鼻の通りが良くなってきたような…。

銚井修一

（京都大学大学院工学研究科生活空間学専攻教授）